いる状況で、家族は家族同士でけんかをする状況がありましたね。認知症の症状がどの程度になったら施設に入るのかという基準というものがないので、難しいですが、その見極めのアドバイスをすることもケアマネジャーの役割じゃないかと思うんです。

【竹中】 一番介護が必要なときは施設へ入所、そして落ち着いてきて介護の負担が下がったときに介護体制が整えば、また在宅に戻ればいいんじゃないですかと僕は家族の人に話すんですね。

【土屋】 いつも思うんですが、何が幸せか分からないですよね。本人の立場に立ってもご家族の立場に立っても分からないから。その時の状況で本人が幸せに思える環境を整えることしか僕たちにはできないかなと思う。

【迫】 やっぱり隠さないことが大切じゃないかな。そう感じることがあるので。

【竹中】 いや隠そうというつもりではなく、受け入れることができないのだと思うんです。一番認めることができないのが身内。親だからこそ認知症ということを受け入れたくないと思うんです。

【赤野】 そうですね。時間をかけて病院に受診しましょうと言っていくしかないですね。

【塩井】 お互いの信頼関係ができれば受け入れてもらえると思います。時間は必要かもしれませんが。

一人ひとりがサポーターがつくる地域

【赤野】 地域でも、今は高齢者が多くなっているので、近所の人がゴミ出しを手伝ってくれたり、声かけをしてくれたりする現状はあるんです。みんな、何かしなければならないという意識はあるので、だれでも手伝うことができる環境を作って、それを若い人にも広げることが大切ですよね。

【迫】 高齢者だけの家庭、息子夫婦との家庭などいろんな家庭があるが、介護は嫁だけの仕事ではありません。一人だけがするのではなく、家族全員が関心をもって欲しいですね。

【土屋】 そのためにも企業などが認知症サポーター養成に協力して欲しいですね。仕事しているからできないではなくて、企業に研修を広げていくことが必要だと思っています。

【赤野】 以前は、キャラバン・メイトがそんなに大事なものだとは思っていなかったんです。でもとても大事な役割なんですね。機会があれば住民の人にも認知症サポーター養成講座を受けてほしいと思います。わたし自身、認知症サポーター養成に関わっていることはケアマネジャーとして有意義なことだと思っています。

【土屋】 若い人は認知症の人にネガティブなイメージがあると思う。まず偏見を無くし、認知症を知ってもらうこと。本当の姿を知ってもらうことが大切ですね。

【竹中】 高齢者と同居していない人たちにも、講習を受けて欲しいですね。

ケアマネの皆さんが考えていることは、認知症にかかわる皆さんの幸せであり、それが何であるのかということ。そのために何でも相談してほしい。悩みを話してほしいとケアマネの皆さんは訴えます。そして、認知症サポーターに対するケアマネの期待はとても大きいものでした。

ケアステーションおおづ 冨田 伸さん　潤心会 迫 みつ子さん　おおつかの郷 土屋 政伸さん　大津町地域包括支援センター 中山 順子さん

子どもの手を輝かせる

室小の6年生が認知症サポーターに

昨年10月27日、室小学校で認知症サポーター養成講座が行われました。町のキャラバンメイト21人が講座を計画し、子どもたちのためのプログラムを作成しました。絵本の読み聞かせやグループに分かれ意見交換を行うワークショップを行い、子どもたちに認知症の知識と理解を深めてもらいました。自分の大好きなおじいちゃん、おばあちゃんのことを考えながら、講座を受けた子どもたちは、終了後は、立派なサポーターになっていました。

大津町の子どもたちの腕にオレンジリングが輝けば、更に認知症にやさしい地域づくりが進みます。

インタビュー

小野杏佳さん（室）

今まで認知症のことは、言葉は知っていたけどくわしくは知りませんでした。しかし、症状がどんなふうに進んでいくのかなどが分かりました。これからは道に迷って困っているおじいちゃん、おばあちゃんがいたら、一緒に歩いていきたいと思います。

キャラバン・メイト　インタビュー

キャラバン・メイトは、認知症サポーター講座を開催し講師を務める、サポーターの生みの親。町ではそんな「メイトさん」を育てるために研修を行っています。

つつじ山荘 介護主任
合志 直子さん（古城）

認知症に関心がある人は少なくないと思うんです。しかし、認知症サポーター養成講座に参加するまではいかないと思うんですね。でも、「みんな行っているから、私も受けに行かなんいかんね」となるように同じ地域で何回も継続して開催していくことが大事だと思います。

自分たちが住んでいる地域で、自分たちの言葉で分かりやすく、地域に密着した講座をやっていきたいと思っています。そこで、近所の人や友人に「認知症に今は関心がなくても、いずれあなたも接点がでてきますよ。そうなった時にどうしますか？」と話しかけたいですね。

わたしが勤務している施設では、施設の人と利用者、その家族みんながオレンジリングを持つことが目標なんです。地域でも区長や民生委員をはじめ、地域の住民がオレンジリングを持っていることが大切だと思います。今後もメイトとして社会に貢献していきたいと思っています。

認知症サポーターが地域をつくる

大津町地域包括支援センター長
西岡 逸郎

地域包括支援センターは高齢者の相談場所です。最近は認知症の人の家族からの相談や医療機関からの相談も多くなっています。

そこで、大津町は５世帯に１人は認知症サポーターがいる地域づくりのため、平成22年度までに2,300人の認知症サポーターの養成を目標として地域、各種団体、企業、学校へ養成講座の開催をお願いしています。

現在までに1,314人の認知症サポーターが誕生していますが、まだまだ先は長いと感じています。

本当は、町民全員が認知症の理解を持てば、認知症の人が安心して住み慣れた地域で暮らすことができるのではないかと思っています。

これから、お父さんやお母さんが、もしかしたらあなた自身が認知症になったときに、どんなところで、どのように暮らしていきたいのかを考えてみてください。

皆さんの認知症サポーター養成講座への参加を、よろしくお願いします。

この場所でいつまでも

あなたもわたしも、だれもがみんな幸せを願っています。

「あなたの幸せはわたしの幸せ」

大好きなおばあちゃんが大津町で心地よく暮らしてくれたら、それが自分の幸せ。

そんな思いが大津町にある限り、オレンジリングは輝き続けるでしょう。